

第1章 松本市の歴史的風致形成の背景

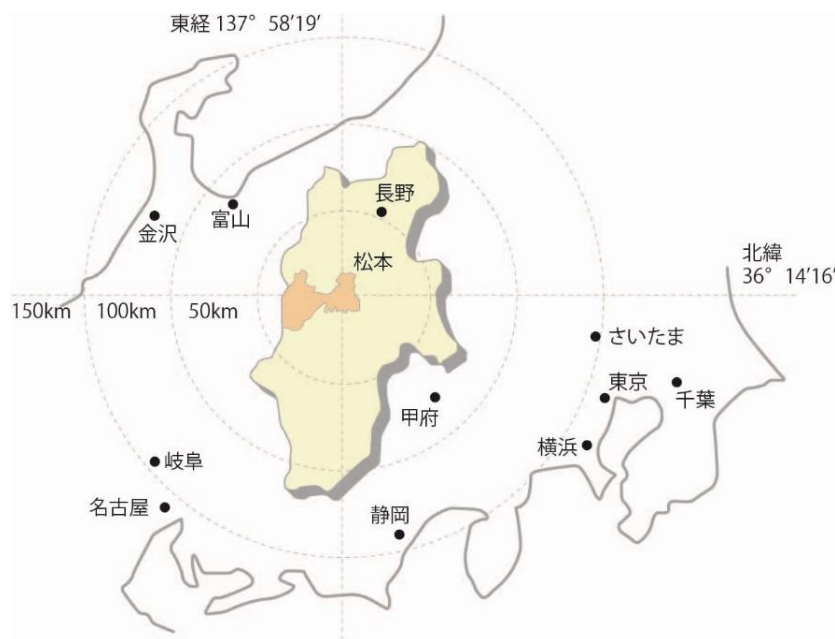
1 自然的環境

(1) 位置

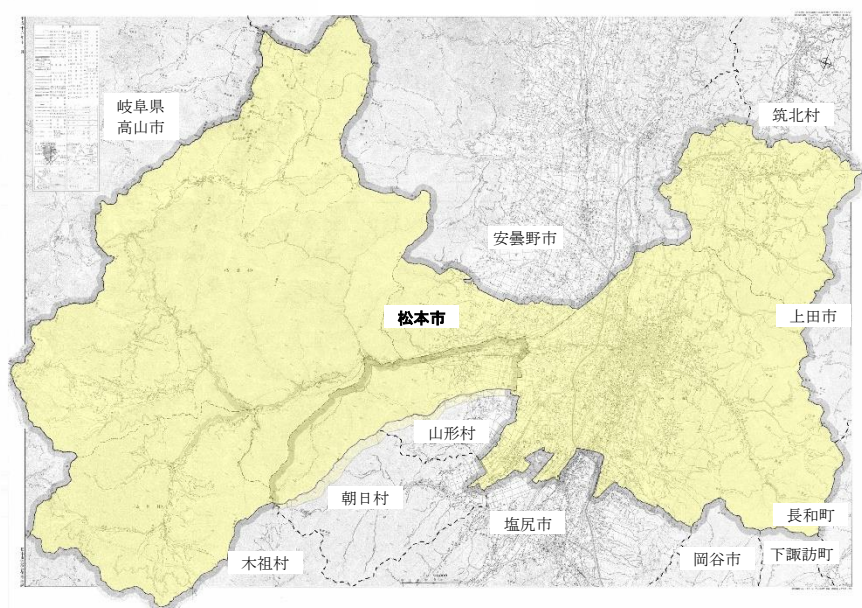
松本市は長野県のほぼ中央西部、県庁所在地の長野市から南西約 50 k m の距離に位置し、東は上田市等、西は岐阜県高山市、南は塩尻市、岡谷市等、北は安曇野市、筑北村等にそれぞれ接しています。

市役所本庁舎所在地は、東経 137 度 58 分、北緯 36 度 14 分に位置しています。

松本市の位置



松本市全図

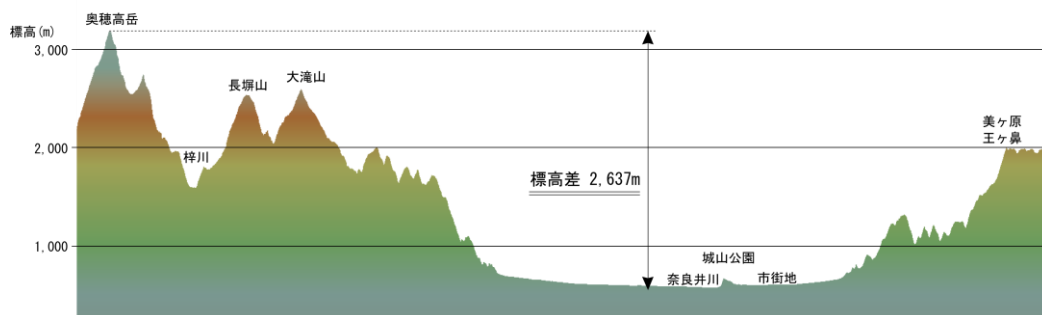
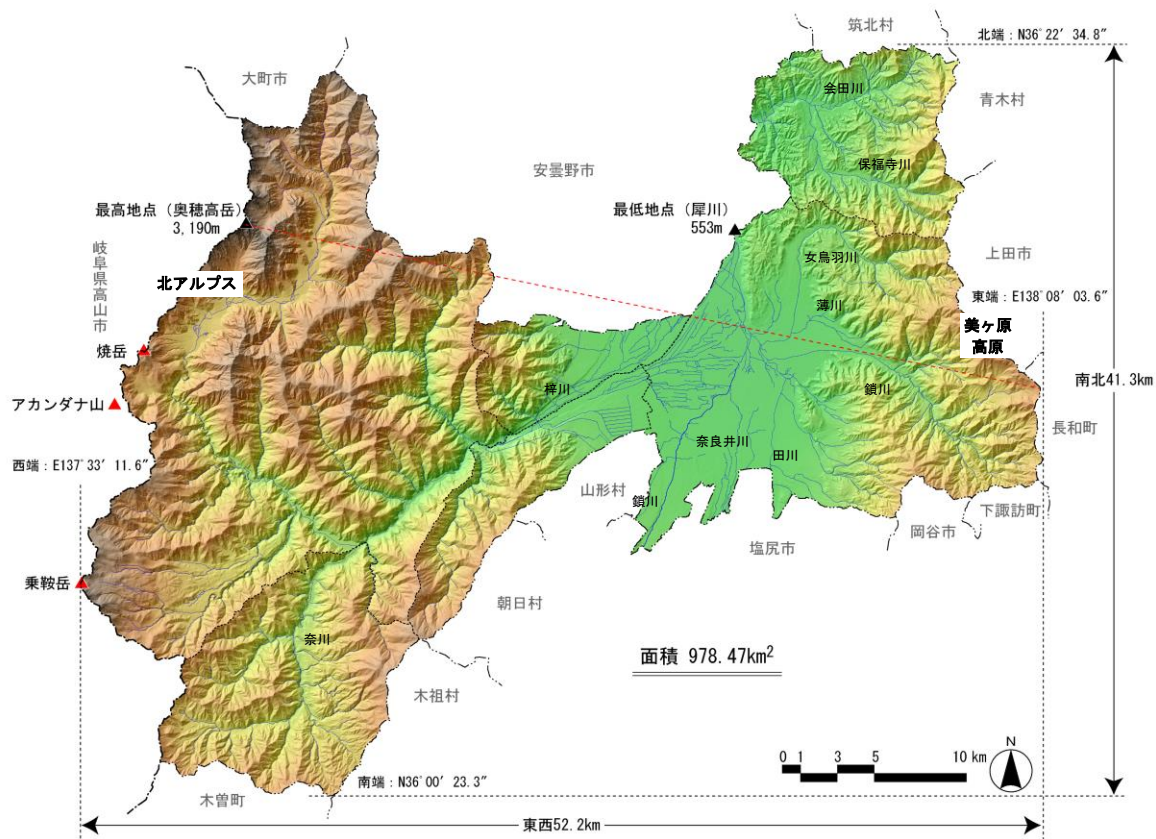


(2) 地理・地形・水系

松本市は東西に 52.2 k m、南北に 41.3 k m あり、面積は 978.47 km²と長野県内では最も広い自治体です。面積の約 61%は森林で占められ、西に北アルプス、東に美ヶ原高原の山岳を配し、それらに続く山地丘陵地と本州中央部を横断する糸魚川静岡構造線に沿って南北に延びる松本盆地の一部として発展してきました。

松本盆地はその大きさでは、南北約50 k m、東西約10 k m、面積は約480km²で、内陸盆地としては日本第一級の規模をもっています。

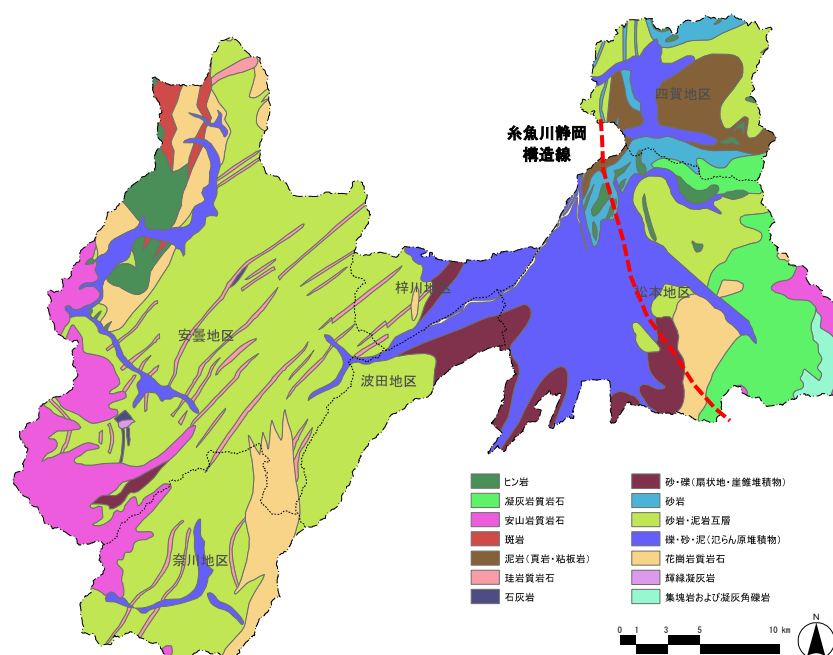
松本市の地形



また、北アルプスは起伏の多い急峻な地形となっており、標高3,000m以上の山が9座あり、これは全国で最も多い数値となっています。標高の最高点は奥穂高岳の3,190m、最低点は島内犀川^{さい}の553mとなっており、市域の標高差は2,637mに及びます。

地質は、松本盆地のほぼ中心を南北に走る糸魚川静岡構造線をはさんで、西側の飛騨山脈は中生代の付加体（付加コンプレックス）と中生代から新生代第四期の火成岩類で構成されています。一方、東側は北部フォッサマグナの海に堆積した新生代新第三紀層と、その後の火山活動による火成岩類で構成されています。

松本市の表層地質図



出典：国土交通省国土政策局国土情報課 土地分類基本調査

松本市街地は標高600mの等高線が円形に取り囲んでおり、ここに向かって梓川・奈良井川・鎖川・田川・女鳥羽川・薄川^{あずさ}などの河川が流れ込み、市内で合流を繰り返し犀川となつて、最終的には信濃川として日本海に流れ込んでいます。

こうした市街地に流れ込む河川の洪水などにより運ばれた砂礫によって扇状地が形成されています。これらの扇状地は互いに重なったり、古い扇状地の上に新しい扇状地が形成されたりして、複合扇状地となっています。これら扇状地の形成の時期は、今から2万～5万年前の更新世後期と考えられており、ほとんどが現行河川によるものです。

松本盆地一帯は一大地下水盆となっており、県内で最も恵まれた地下水賦存地帯^{ふそん}を形成しています。低平部には多くの池状湧泉^{ちじょうゆうせん}が存在し、田川と奈良井川には

さまれた出川、鎌田、笹部、征矢野、高宮から両島、渚に至る地域や薄川及び女鳥羽川周辺の筑摩、源地、深志、清水などでも多くの泉水が湧出しています。松本盆地には180～193億トンの地下水があると推計されています。

この豊富な地下水は、城下町が形成される以前から生活用水として使用され、古くから市民の生活に密着し、現在も活用されています。松本平では周囲の山並みや清流など豊かな自然がもたらす恵みがこの地方の産業や文化の礎となっています。

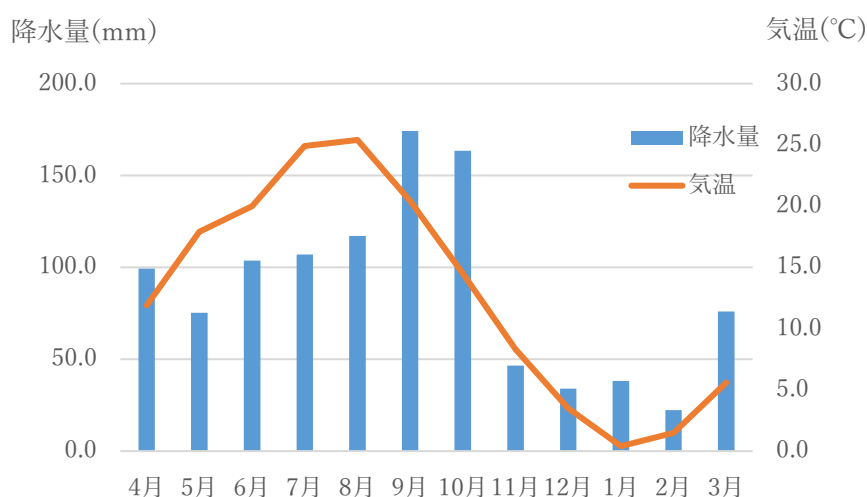
また、高い山々の稜線と平坦地の田畑、集落の眺めが対照的であり、特徴のある山岳景観や農村景観を形成しています。

(3) 気象

松本市の気候は、日較差、年較差ともに大きい内陸性中央高地型気候で、湿度が低く、さわやかな体感を覚えるとともに、空が澄み、長い日照時間に恵まれていることが特徴です。過去5年（2015～2019）の年平均気温は12.9度、年間の降水量は1,057mm、平均湿度は66%、日較差は年間を通じて10度以上、年較差は25度と大きくなっています。夏は朝晩過ごしやすいものの、日中は30度を超える真夏日が続く、冬は放射冷却現象により朝方の冷え込みが厳しく、氷点下10度を下回ることもあります。

市域でも、標高の高い上高地や白骨温泉、乗鞍高原、野麦峠などでは、亜寒帯湿潤気候で、冬は最低気温が氷点下20度を下回り寒さが厳しいところです。

月別平均気温・降水量（2015年～2019年平均）



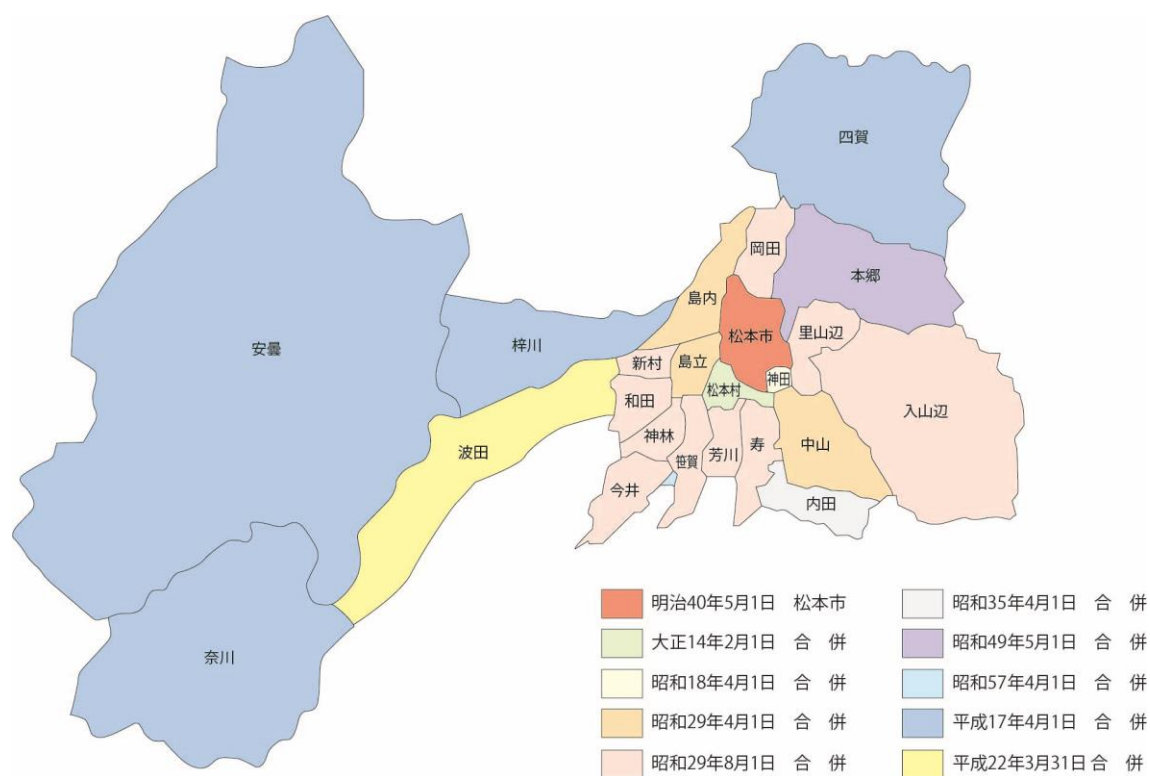
松本特別地域気象観測所の値

2 社会的環境

(1) 市の沿革

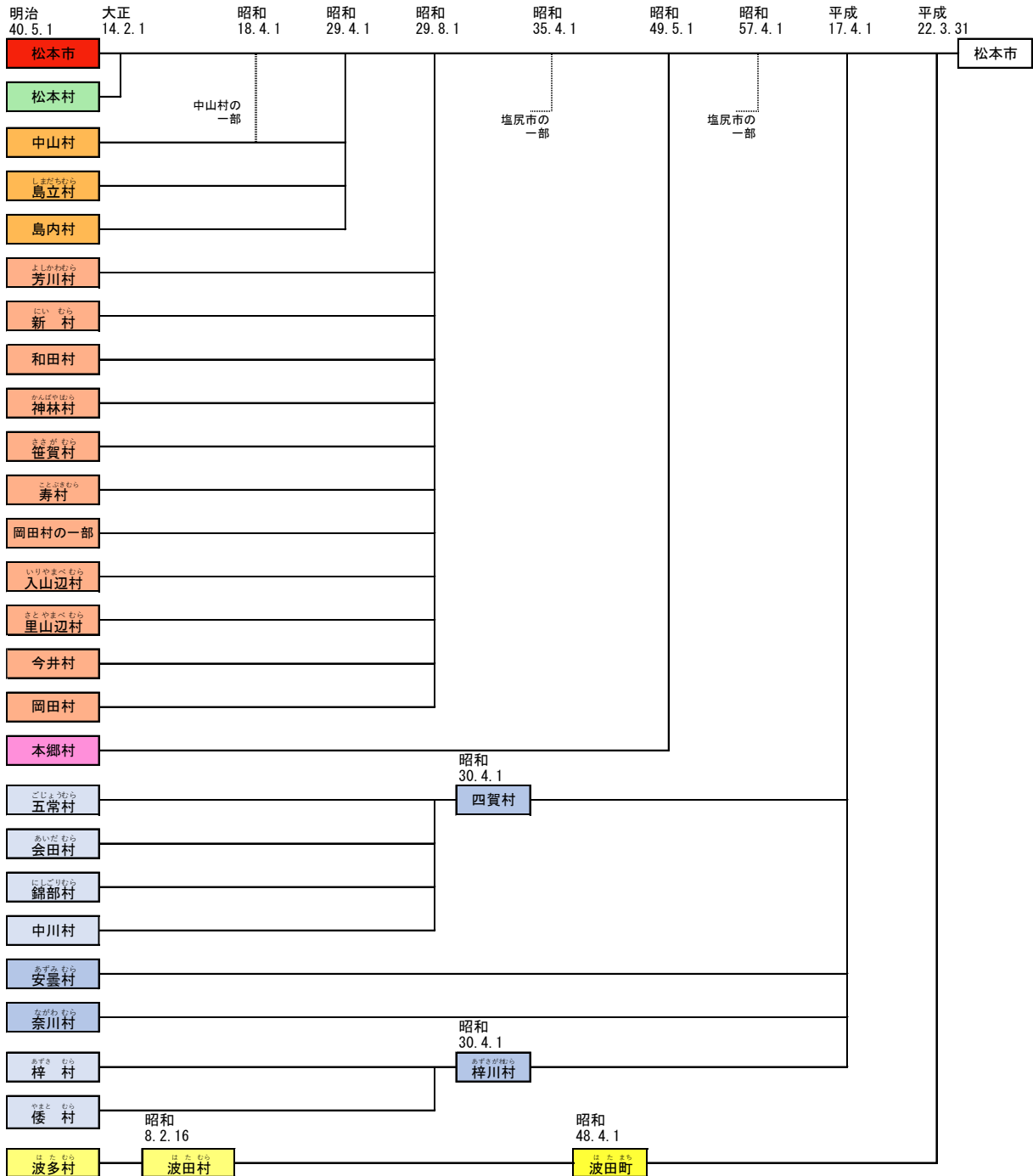
明治 22 年（1889）に施行された市制町村制を受けて同年 4 月 1 日に松本町制が施行され「松本町」が誕生しました。その後、明治 40 年（1907）5 月 1 日に市制が施行され「松本市」が誕生しました。大正 14 年（1925）には松本村と合併して、昭和に入ると同 29 年（1954）に周辺 13 村と、同 49 年（1974）には本郷村と合併して市域を拡大して、平成の大合併では同 17 年（2005）、四賀・安曇・奈川・梓川の 4 村と、同 22 年（2010）に波田町と合併し、現在の松本市となりました。

旧市町村の位置図



○ 市町村合併の経緯

松本市市制施行後の合併の経過

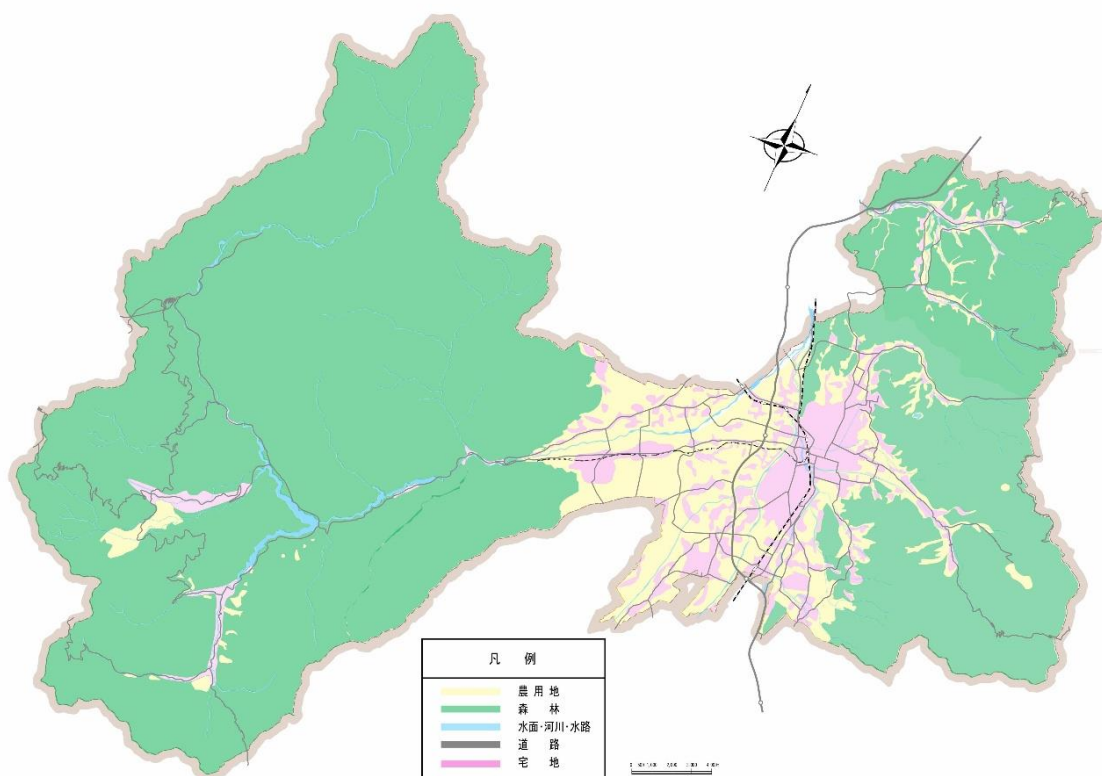


(2) 土地利用

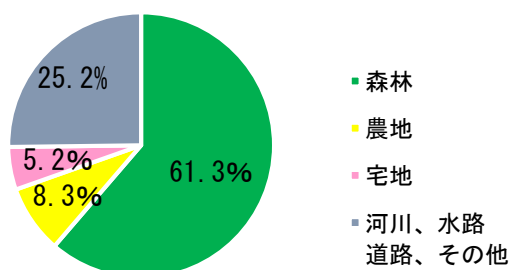
松本市の土地利用は、森林が61.3%を占め、農地が8.3%、宅地が5.2%となっています（令和元年版松本市の統計より）。

都市計画区域は、市内全域97,847h aのうち約30.9%に当たる30,191h aを指定しており、そのうち4,008h aには用途地域を設けています。その構成は住居系が68.6%、商業系が7.0%、工業系が24.4%となっています。

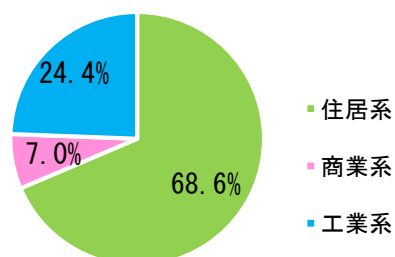
土地利用の状況



土地利用の割合



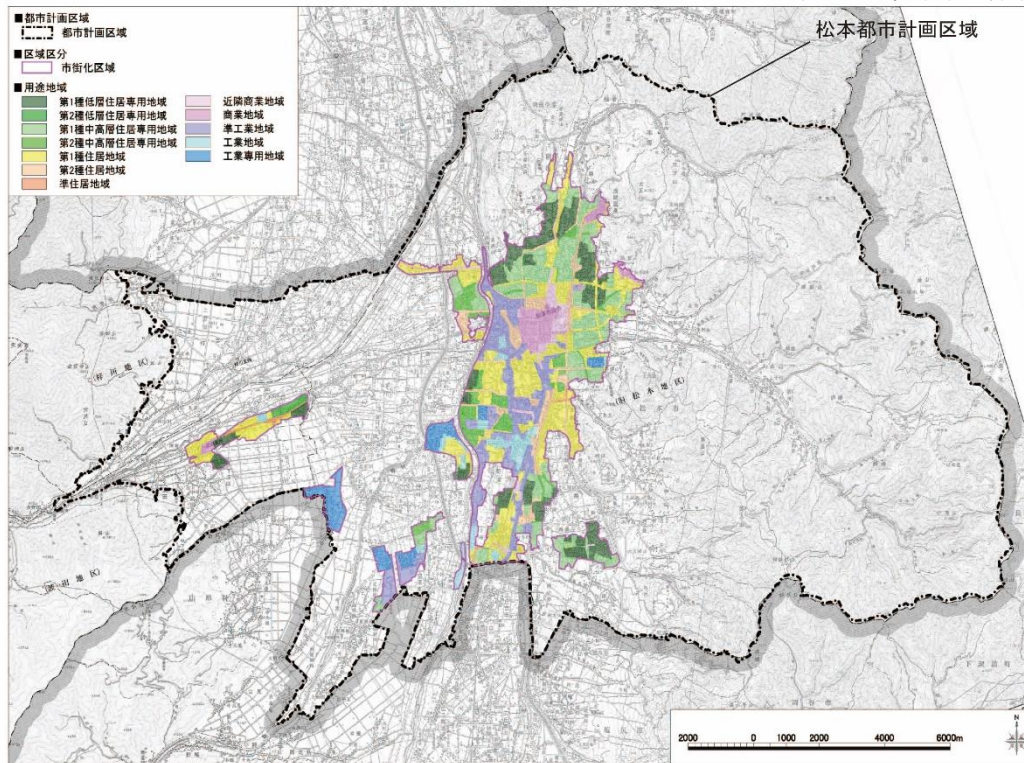
用途地域の割合



出典：R元年版松本市の統計

都市計画区域の指定状況

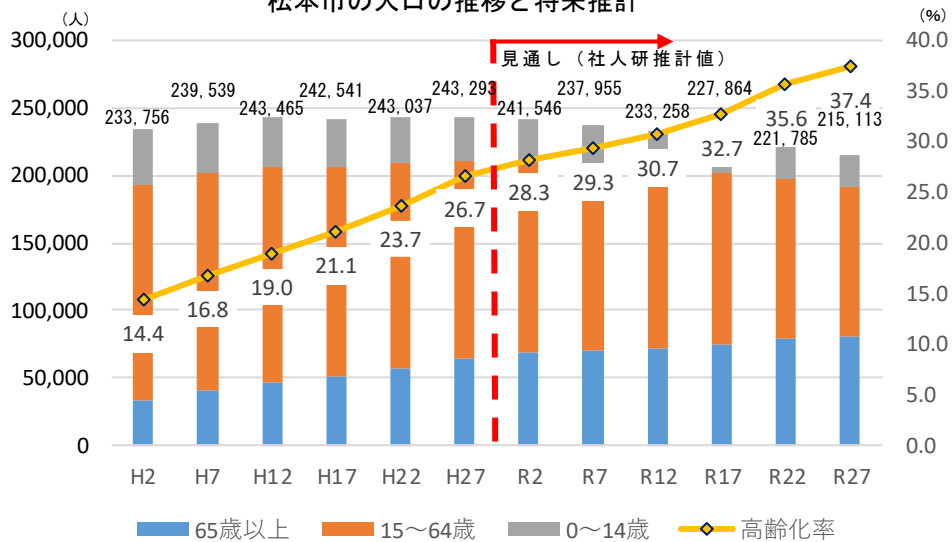
出典：H31 松本市の都市計画



(3) 人口動態

松本市の人口は、平成14年（2002）の約24万5千人をピークとして、以降緩やかな減少に転じ、令和2年（2020）4月1日時点で237,837人、世帯数105,933世帯（松本市統計月報より）となっています。人口は、今後更に減少していくと予測されています。更に、高齢化も進み、令和27年（2045）には高齢化率が37.4%になると予測されています。

松本市の人口の推移と将来推計



出典：H27年まで国勢調査、R2年以降：社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」より

(4) 交通機関

松本市は近世以降、松本城の城下町として現在の中心市街地の基盤が形成され、善光寺街道、野麦街道、千国街道^{ちくに}が交わる交通の要所として、信濃国の経済の中心となりました。

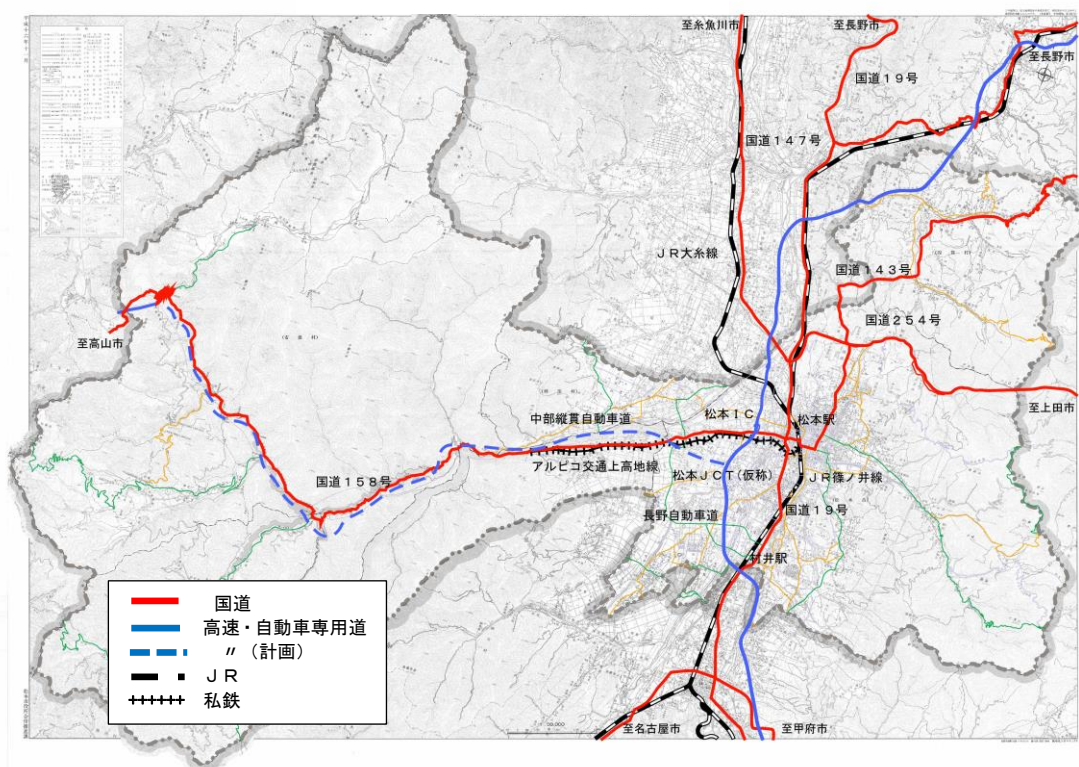
現在、高速道路網としては長野自動車道が市の中央を縦断しており、中央道を經由して首都圏及び中京、京阪神とつながっています。また、中部縦貫自動車道が松本JCT（仮称）から岐阜県高山市を經由し福井県福井市まで計画されています。

国道は、国道19号が市の中央部を縦断しているほか、国道143号、同147号、同158号、同254号が縦横に通っています。

鉄道では、JR篠ノ井線が国道19号と、JR大糸線が国道147号と、アルピコ交通上高地線が国道158号とそれぞれ並走して運行されています。

また、市内では中心市街地で周遊バスであるタウンスニーカーや路線バスが運行されているほか、周辺地域ではコミュニティバスや乗合タクシーが運行されています。

松本市内の主要交通網図



(5) 産業

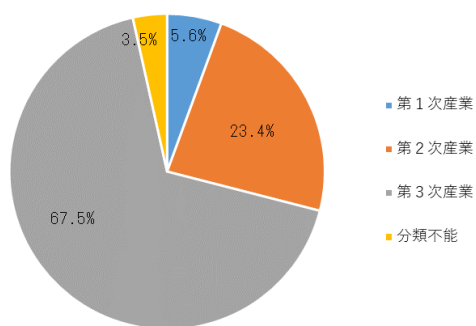
平成 27 年（2015）国勢調査によると、松本市の就業者合計は 121,552 人となっており、産業別では農林水産業など第 1 次産業が 6,794 人（5.6%）、製造業などの第 2 次産業が 28,388 人（23.4%）、卸・小売業やサービス業などの第 3 次産業が 82,036 人（67.5%）、分類不能が 4,334 人（3.5%）で、第 3 次産業に従事する人が最も多くなっています。

農業の産出額では、果樹、野菜類、米穀類、畜産物がバランスよく産出されており、ブドウやスイカ、ネギなどが産地化されています。

製造業では、情報通信機器、食料品、電子部品の製造品出荷額が多くなっています。

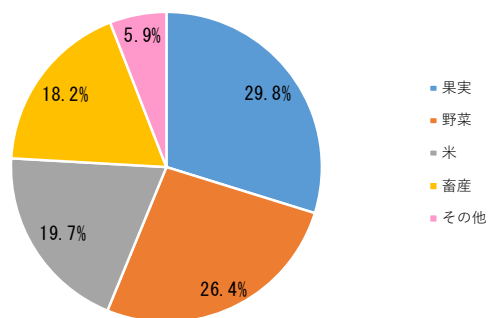
また、サービス業などの第 3 次産業における従事者数では、卸売業、小売業の割合が最も高く、次いで医療、福祉業、宿泊業、飲食サービス業の順となっています。

松本市の就業人口の構成



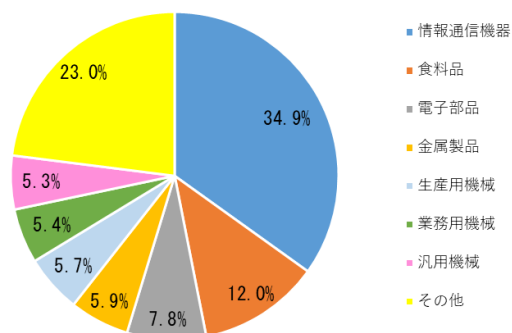
出典：H27(2015)国勢調査

松本市の農業産出額の構成



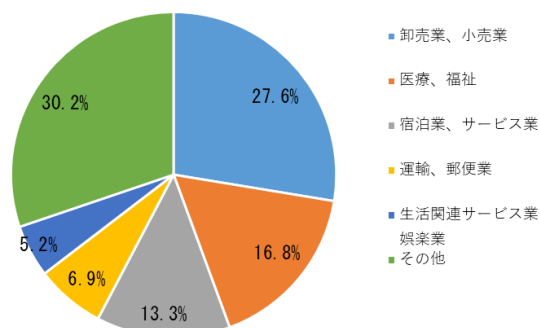
出典：H30(2018)市町村別農業産出額(推計)

松本市の製造品出荷額の構成



出典：H29(2017)松本市工業統計

松本市の第 3 次産業従事者数の構成



出典：H28(2016)経済センサス基礎調査

(6) 観光

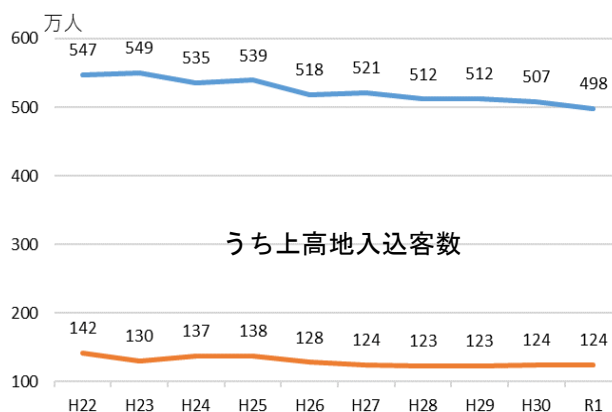
松本市は、国宝松本城を中心とした市街地、上高地、乗鞍高原、美ヶ原などの高原、白骨温泉や浅間温泉、美ヶ原温泉といった温泉地等、豊富な観光資源を有する長野県内でも有数の観光地です。

年間の観光入込客数は平成30年（2019）に約507万人となっており、長期的には減少傾向にあります。市内の観光地では上高地の入込客数が最も多く、約124万人となっていますが、観光バス入山規制を開始した平成16年（2004）以降減少傾向にあります。松本市のシンボルである松本城については平成28年（2016）には近年最高の約99万人が訪れましたが、その後は微減となっています。

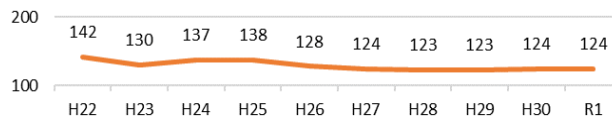
また、外国人観光客数はアジア諸国を中心として大きく増加しており、延べ宿泊者数は平成22年（2010）の約3万人が令和元年（2019）には約19万人と6.2倍となっています。

令和2年（2020）以降は新型コロナウイルス感染症の蔓延により観光客の動向が大きく変容することが見込まれています。

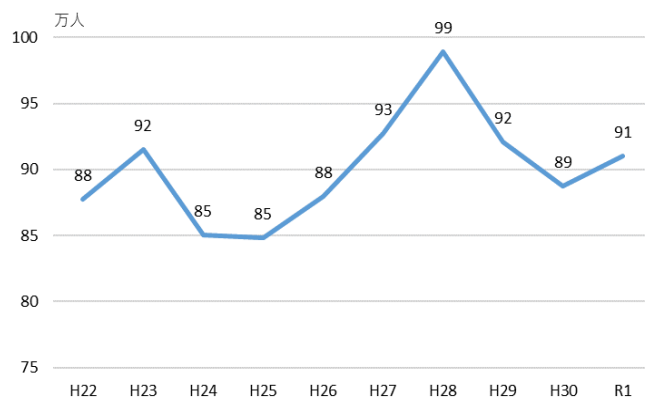
松本市入込客数



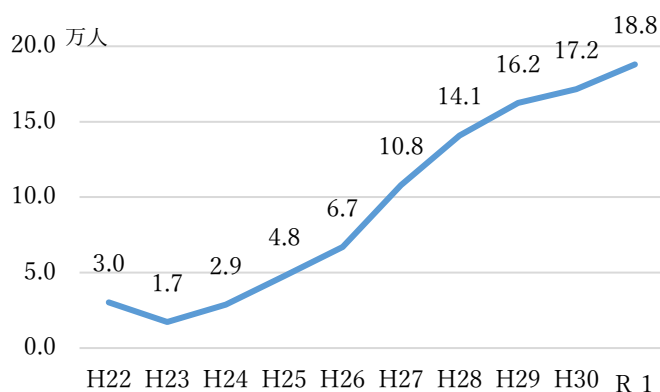
うち上高地入込客数



松本城入場者数



外国人宿泊者数



3 歴史的環境

(1) 旧石器時代から古墳時代の松本

松本市域に人が暮らし始めたのを確認できるのは、今から約1万4千年から1万3千年前の旧石器時代のことで、この時代の石器が市内で採集されています。人々の暮らしの跡を発掘調査によって確認できていないため、当時の詳しい様子はわかっていません。

縄文時代になると、市内にも数多くの遺跡が確認されるようになります。縄文時代は、今から約1万3千年から2,300年前までの1万年以上続いた時代で、松本市内の山麓を中心に、集落の跡が発掘調査によって明らかにされ、当時の生活が垣間見えてきました。

市内の代表的な遺跡としては、坪ノ内遺跡（中山地区）、小池遺跡（内田・寿地区）、葦原遺跡（波田地区）、縄文時代後・晩期のエリ穴遺跡（内田地区）などがあげられます。このうち、エリ穴遺跡からは、この時期の耳飾りが全国最多の2,600点以上出土したほか、祭祀の際に使われたと思われる人の顔を表現した土版（人面付土版）も出土しています。エリ穴遺跡出土品は長野県宝に指定されています。



長野県宝 エリ穴遺跡出土品

弥生時代は、約2,300年から1,700年前までの約600年間で、松本市内では、弥生時代初期の遺跡はわずかししか確認されておらず、その頃のものとして、針塚遺跡（里山辺）の再葬墓出土弥生土器が松本市重要文化財となっています。弥生時代では、中期以降の集落の跡が主に確認されており、代表的な遺跡として、百瀬遺跡や、銅鐸の破片が出土した宮渕本村遺跡などが挙げられます。

古墳時代は3世紀中頃から7世紀頃までをいい、前期（3世紀中頃～4世紀）、中期（5世紀）、後期（6～7世紀）に区分されます。現在、松本市では160基ほどの古墳が確認されています。

3世紀末頃の築造とされる弘法山古墳は、東日本でも最も古い古墳の一つであり史跡に指定されています。墳形は前方後方墳であり、石室上から東海系の土器が出土したことから、被葬者は東海地方との関連が指摘されています。弘法山古墳の鏡などの出土品は長野県宝に指定されています。4世紀前半には弘法山古墳



史跡弘法山古墳

と隣接する^{かごやま}棺護山にある中山 36 号墳がありますが、その後 5 世紀後半まで松本地域では古墳が見られません。

5 世紀後半になると再び古墳が築造されるようになり、代表的なものとしては針塚古墳（長野県史跡）や、金銅製天冠^{てんかん}を含む出土品が長野県宝に指定された桜ヶ丘古墳などがあります。

後期になると市内各地に多くの古墳が造られるようになりますが、主なものとして^{みなみかた}南方古墳は盗掘を免れ、大量の副葬品が出土し松本市重要文化財に指定されています。また、中山地区では 6 世紀後半から 7 世紀にかけて丘陵一帯に古墳が築造され、その数は明治初年には 80 余基といわれており、中山古墳群として松本市特別史跡に指定されています。

7 世紀中頃からは奈良井川西岸に開発の手が入り、集落が形成されるようになりますが、その開発を主導したと考えられる有力者の古墳が新村地区に築かれ、その一つである秋葉原^{あきはらは}第 1 号古墳（松本市特別史跡）は 8 世紀に入ってから築造されています。

「日本書紀」には、天武 14 年（685）に、天武天皇が行宮造営のため、造行宮使一行を科野^{しなの}に遣わしたと記されています。造行宮使一行が出立してから 11 か月後に天武天皇が没したことから、行宮の工事は中断して終わっています。発掘調査によっても東間行宮^{つかま}の所在地などは明らかになっていません。



長野県史跡 針塚古墳



松本市特別史跡 中山古墳群の 15 号古墳

(2) 奈良・平安時代の松本

奈良・平安時代は、律令制度による国家体制の整備が行われた時代ですが、それに伴い畿内から各地の国府を結ぶ官道が設置されました。松本には東国各地を結ぶ東山道が通っていました。

また、郷里制^{ちくま}による行政区画では、現在の松本市域は筑摩郡と安曇郡が置かれ、10 世紀前半に編纂された『倭名類聚^{わみょうるいじゆ}』



県町遺跡出土品（緑釉陶器片）

『抄』には「信濃国在筑摩郡…」と書かれており、^{ちいさがた}小^{あがたち}県郡にあったとされた信濃国府はこの頃までに筑摩郡に移されたと考えられます。国府の所在地は、これまで^{そうご}惣社、^{つかま}大村、筑摩などが候補地に挙げられ、発掘調査をしてきましたが、まだ確定できていません。東山道のルートに近いと推定される^{あがたち}県^{りよくゆう}町遺跡では、東日本では多賀城跡（宮城県多賀城市）に次ぐ量の^{りよくゆう}緑釉陶器片が出土しており、松本が東山道における重要な拠点であったことをうかがわせます。

また、当時は軍事や輸送のため馬が重要であったことから、国家が馬の管理をするようになり、朝廷直轄の牧場である「御牧」が設置されます。「御牧」は信濃に始まり^{こうずけ}上野、甲斐、武蔵など東国の各地に広げられ、都などに軍馬を供給しました。『延喜式』には信濃に四カ国中最多の16の御牧が置かれたことが記されており、筑摩郡には^{はいばらのまき}埴原牧と大野牧があったといわれています。埴原牧は現在の中山、寿、内田、塩尻市片丘周辺、大野牧は波田、安曇、山形村周辺が想定されています。

松本周辺を含む信濃国全体に見られる傾向ですが、それまで継続して繁栄してきた集落が一部の拠点集落を除き、10世紀前半には一斉に消滅し、9世紀末から10世紀になるとそれまで集落がなかった場所で新たに集落が営まれるようになります。その原因は自然災害などが考えられますが、よく分かっていません。

「^{ながら しん}長良私印」（松本市重要文化財^{み まざわがわ}三間沢川左岸遺跡出土銅印）が出土した三間沢川左岸遺跡は、9世紀中頃から10世紀末まで150年継続し突如消滅した集落ですが、計画的に配置された水路など都市計画的に設計された集落であり、中央勢力が初期荘園を経営した集落ではないかと考えられています。

平安時代になると、年代がはっきりとしないものの、市内の山麓に寺院が建立され始めます。^{ごふくじ}牛伏寺の木造十一面観音及^{きやうじ}両脇侍立像（重要文化財）を始めとした^{ほうこう}仏像群、放光寺の木造十一面観音立像（長野県宝）、旧海岸寺の木造十一面千手観音立像（長野県宝）といった仏像彫刻はこの時期のものです。



長野県宝 旧海岸寺木造十一面千手観音立像

(3) 中世の松本

鎌倉時代には、国ごとに守護が置かれ、荘園や公領には地頭が置かれました。信濃国守護は、最初は^{ひき}比企氏でしたが、後に北条氏に代わりました。鎌倉幕府が倒れ北条氏が滅びると、小笠原氏が信濃国守護となり、^{いがわ}井川の館（史跡井川城跡）を本拠地として信濃国を治めました。

小笠原氏は信濃国守護でしたが、その支配地は主に松本から南信地方に限られ、他の地域は在地の有力武士（国人）が勢力を張っていました。そのため、応永7

年（1400）には、守護として赴任した小笠原^{ながひで}長秀^{おおとう}に対して各地の国人が反抗し大塔合戦が起き、長秀が守護を解任されています。また、小笠原氏内部で相続を巡る争いが起き、小笠原家は2つに分かれ、府中（松本のこと。平安時代に国府が置かれたため、このように呼ばれました。）と伊那をそれぞれ本拠地としました。府中の小笠原氏の本拠地は、その後戦乱が激しくなる15世紀後半には、平地の井川の館から林（大嵩崎）に移り、山城である林城（林大城・小城）を構えています。

戦国時代には、市域東部の山にあった、小笠原氏の林大城・林小城（史跡小笠原氏城跡）と、桐原城、山家城、埴原城（以上、長野県史跡）などの山城が修築されました。

天文17年（1548）、小笠原長時が守護の時、甲斐（現在の山梨県）の武田晴信（信玄）が信濃国に攻め入ってきました。長時は塩尻峠で武田方と戦い、敗れます。天文19年（1550）、武田勢が松本に攻め込んでくると、小笠原勢は戦わずして敗走し、本拠地の林城は周囲の城とともに落城しました。武田信玄は府中に入ると、それまで小笠原勢の島立氏が拠っていた深志城（松本城の前身）を本拠地として修築しました。

天正10年（1582）、武田氏が織田信長との戦いに敗れ滅びると、府中は織田勢の支配下となりましたが、織田信長も本能寺の変で殺されてしまいます。その際、小笠原長時の子の貞慶が信濃国に攻め入り、かつての領地を取り返し深志城に入りました。貞慶は城の名を松本城と改め、これ以降、松本の地名が用いられるようになりました。貞慶は領国の支配を確立すると、松本城と城下町の整備に着手します。天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻め後、豊臣氏の政権が確立し、徳川氏が北条氏の旧領である関東へと転封となり、徳川氏に従っていた小笠原氏も下総国古河（茨城県古河市）へ移りました。

小笠原氏は筑摩神社を厚く信仰し、筑摩神社本殿（重要文化財）や、神宮寺だった旧安養寺の銅鐘（松本市重要文化財）を寄進しました。また、徳雲寺跡（松本市特別史跡）は、現在の山辺地区の有力武士であった山家為頼が、禅僧の雪村友梅を招いて開創したと伝えられています。現在の梓川地区の有力武士であった西牧氏に関係した文化財として、大宮熱田神社本殿・大宮熱田神社若宮八幡宮本殿（ともに重要文化財）、釈迦堂の釈迦如来坐像（松本市重要文化財）などがあります。

平成20年（2008）に15世紀代の築造と推定される石垣が出土した殿村遺跡



史跡小笠原氏城跡（井川城跡）



史跡小笠原氏城跡（林大城・林小城）

(四賀地区)は、当初この地域を支配した会田氏の居館ではないかと考えられていましたが、9年間に及ぶ発掘調査や、文献その他周辺の地名調査などから背後の虚空蔵山を中心とした信仰空間である可能性が高いことが判明しつつあります。古代の東山道の支道、近世には善光寺街道沿いに面した交通の要衝であり、今後この地域の歴史文化的特質を明らかにすることができると期待されています。



殿村遺跡の石垣

(4) 近世の松本

豊臣秀吉が天下を統一すると、小笠原氏は関東に移され、代わって石川数正が松本を統治しました。石川氏以降、水野氏が藩主となるまでの間は、藩主が目まぐるしく交替しています

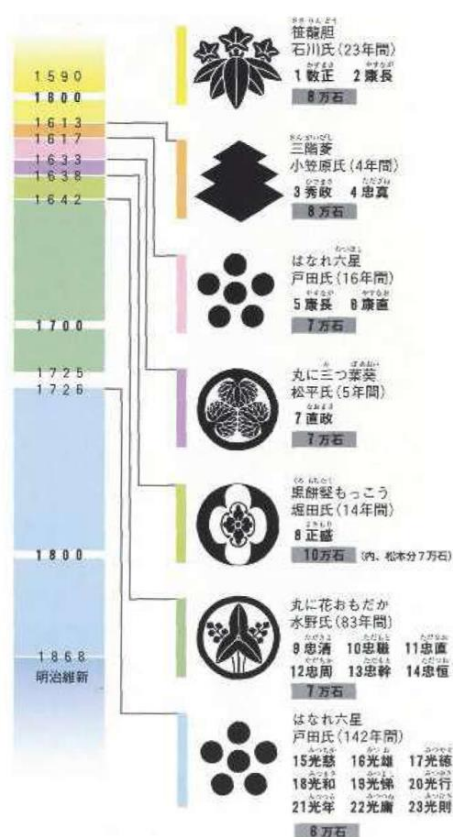
松本藩を治めた藩主は、6家23代で、その時の石高は以下のとおりです。

石川氏	(1590～1613)	2代	8万石
小笠原氏	(1613～1617)	2代	8万石
戸田氏	(1617～1633)	2代	7万石
松平氏	(1633～1638)	1代	7万石
堀田氏	(1638～1642)	1代	10万石
			(うち松本7万石)
水野氏	(1642～1725)	6代	7万石
戸田氏	(1726～1871)	9代	6万石

転封・改易などで藩主が変わるたびに所領に変動があったものの、松本藩の石高表現は、廃藩置県まで藩主であった戸田氏の石高を用い、6万石としています。小笠原氏より後の城主は、松平氏に代表されるように、徳川家と関係の深い藩主が置かれています。

石川数正は天正19年(1591)に城普請に着手し、その子の康長が城普請を継ぎ、文禄2～3年(1593～1594)には天守、乾小天守が築造されました。

なお、天守の築造年代については諸説ありますが、本計画では松本市が平成元年(1989)に設置した「国宝松本城築城年代懇談会」の



松本藩の歴代藩主

答申（平成2年（1990））に基づき、康長の手によって文禄2年（1593）から3年（1594）の間に築造されたものとしています。

慶長18年（1613）、石川康長は大久保長安事件に連座して改易され、豊後国佐伯（大分県佐伯市）に配流となりました。

石川氏の後に藩主となった小笠原秀政（貞慶の子）は、引き続き城下町の整備を進めますが、秀政とその長男忠脩は、慶長20年（1615）の大坂夏の陣において戦死します。家督は次男の忠政が継ぎ、元和3年（1617）に播磨国明石（兵庫県明石市）に転封となりました。

小笠原氏の後には、戸田康長が上野国高崎（群馬県高崎市）から入封しました。戸田康長は、徳川家康の義妹の松姫を正妻とし、家臣としては初めて松平姓を名乗ることを許され、松平丹波守を名乗りました。寛永10年（1633）、康長の子の康直の時に播磨国明石（兵庫県明石市）へ転封となりました。

次いで松平直政が越前国大野（福井県大野市）から入封しました。直政は、天守に辰巳附櫓と月見櫓を増築し、銭座を設け鍋屋小路で寛永通宝の鑄造を行わせています。また、武家地の拡充は続き、六九町、新町、田町の町割が形成されました。

直政は寛永15年（1638）に出雲国松江（島根県松江市）に転封となり、次いで堀田正盛が武蔵国川越（埼玉県川越市）から10万石（関東にも知行地があり、松本は7万石）で入封しました。正盛は老中として幕府の中樞にいた人物であったため、松本に常勤していたわけではなく、わずか4年で下総国佐倉（千葉県佐倉市）に転封となりました。

堀田氏の後、寛永19年（1642）に水野忠清が三河国吉田（愛知県豊橋市）から入封しました。この後、水野氏は6代にわたり松本藩主となります。水野氏時代には城下町の整備がほぼ終了しています。

2代目の忠職は慶安年間（1648～1652）に領内惣検知を行いました。その検知台帳は明治時代の地租改正まで使われたといわれます。

3代目の忠直の治世の貞享3年（1686）10月には、安曇郡長尾組中萱村（安曇野市三郷）の元庄屋の多田加助を指導者とする大規模な百姓一揆がおきています。

5代目の忠幹は、享保7年（1722）から松本藩の地誌を編纂させ、享保9年（1724）に『信府統記』として完成しました。この『信府統記』は、松本藩の地誌として、歴史・地理・経済等多岐にわたる記載があり、江戸時代の地誌として一級資料とされています。

享保10年（1725）、6代目の忠恒は、江戸城松の廊下で刃傷事件を起こし、水野氏は改易となってしまいます。徳川家康の生母の於大の方が水野氏の出身であり、将軍家と親しい関係にあったため、水野氏は後に沼津（静岡県）5万石として再興されています。水野氏の改易後の約半年間、松本藩は幕府直轄となり、松代藩真田家が松本城を管理しました。

享保 11 年（1726）に戸田^{みつちか}光慈が志摩国鳥羽（三重県鳥羽市）から入封し、以降明治維新を迎えるまで 9 代 144 年にわたり戸田氏が松本藩主となります。

光慈が藩主となった翌年には松本城本丸御殿が火災に見舞われました。松本移封前の享保 2 年（1717 年）にも江戸屋敷を火災で失っていた戸田氏は、立て続けの巨額の出費によって本丸御殿の再建はできず、政庁は二の丸御殿に移されました。しかし、手狭であったことから、郡所や町所は大手門西側の城下町の六九に移され、また藩主の私邸である古^{こさんじ}山地御殿を増築しました。

戸田氏入封直後の地図として、「享保十三年秋改松本城下図」があります。これは松本城下町全体を表した精度が高い絵図で、江戸時代の松本城と城下町を示す基本図の一つとなっています。また、この図を元に作成された「天保六年松本城下絵図」は、明治維新後も藩庁から筑摩県に引き継がれ、使用されました。

文政 8 年（1825）には、戸田氏の入封後 100 年を記念して治世百年祭が領内あげて盛大に行われました。しかしこの年は天候不順による凶作で、百年祭の献上品の供出による負担に加えて米価が高騰し、安曇郡小谷^{おたり}4 カ村の農民を中心とした一揆が起きました。農民たちがシナノキの皮で編んだ赤蓑^{みの}を身に着けていたことから、「赤蓑騒動」と呼ばれたこの一揆は、更に周辺の村々の農民が加わって数千人の規模となり、松本藩は関係者 180 人を捕えてようやく鎮圧しました。

(5) 近代の松本

松本藩最後の藩主となったのは戸田家 9 代の光^{みつひさ}則で、明治 2 年（1869）の版籍奉還により、松本藩主から松本藩知事となりました。朝廷への帰順が遅れた光則は、新政府の神道国教化の方針に従い、廃仏毀釈を積極的に行った結果、藩内の寺院 180 カ寺のうち 140 カ寺が廃寺となり、多くの仏像や什物が廃棄されました。その際、廃仏毀釈の難を逃れるため、城下町の念来寺から幕府領である和田の西善寺へと阿弥陀如来坐像及両脇侍立像（松本市重要文化財）などの仏像が運ばれています。

明治 4 年（1871）廃藩置県によって松本藩が廃され、松本県が置けましたが、すぐに全国的に府県の改廃が行われ、松本県に代わって中南信と岐阜県高山地方を範囲とする筑^{ちく}摩^ま県が誕生しました。筑摩県の県庁は松本に置かれ、松本城二の丸御殿が県庁舎として使われました。しかし、明治 9 年（1876）にこの庁舎が火災で焼失すると、中南信地方は長野県に、高山地方は岐阜県に合併され、筑摩県は廃止されました。

廃藩置県により政治の場としての機能を失った松本城天守は、明治 5 年（1872）に売りに出され、取壊しの危機にさらされました。この時、下横田町の副戸長をしていた市川^{りょうぞう}量造らは、自らの資金や人々からの寄附などによって、松本城天守を買い戻し、破却の危機から救いました。また、松本城天守を会場とした松本博覧会を明治 6 年（1873）から明治 9 年（1876）にかけて 5 回開催しました。

破却を免れたものの、松本城は、天守の荒廃が進みました。当時、松本城二の丸跡に校舎があつた松本中学校の校長小林有也^{うなり}はその姿を憂い、有志とともに天守閣保存会を設立して、明治36年(1903)年から大正2年(1913)にかけて、松本城天守の修理工事を行い荒廃から天守を守りました。



明治30年頃の松本城天守（松本市立博物館蔵）

一方、総堀や外堀の一部は埋め立てられ、新たな町として人々が住み始めました。明治40年(1907)には、市制施行により松本町が松本市となり、初代市長に小里頼永^{おりのりなが}が就任しました。その後、小里は連続30年間にわたり市長を務め、国宝市長とも呼ばれました。市長在職中は、県庁移庁期成同盟の陣頭指揮をとり、歩兵第五十連隊、日本銀行松本支店、松本高等学校などの誘致運動の中心となりました。

明治35年(1902)には篠ノ井 - 塩尻間の篠ノ井線が開通しました。鉄道による人や荷物の輸送の比率が高くなると、それまで街道筋に発展してきた市街地も様変わりを始め、駅を基点として交通が整備されるに従って、商圈が駅前に発展していくことになりました。また、鉄道による物資の輸送が可能となり、松本の近代化の牽引役となった蚕糸業の発展にも大きく寄与しました。

明治41年(1908)には、歩兵第五十連隊が旭町に置かれました。当初、連隊の大部分が県外出身者でしたが、まもなく長野県一円が兵員の徴募区に改められ、2年後には連隊全員が地元出身者となりました。以来、地元の松本は軍都とも呼ばれるようになりました。かつての連隊跡地は現在、信州大学松本キャンパスとなっています。

明治期以降に松本の近代産業としてめざましく発展したのが製糸業です。製糸業の発展には原料繭を生産する養蚕業と、蚕の卵を製造する蚕種製造業の発展が必要不可欠でした。もともと松本地域では養蚕業・蚕種製造業が行われていましたが、その規模は小さく、技術的にも未熟なものでした。しかし、明治20年頃から桑園の開発が盛んになり、風穴の利用・蚕種の品種改良や飼育法の改良などによって、養蚕業・蚕種製造業は次第に規模を大きくしていきました。養蚕用具である蚕網^{さんもう}も松本の特産物になっています。このような背景のもと「製糸王国」信濃をリードした片倉（のちの片倉財閥）が明治23年(1890)に松本へ進出し、松本製糸場を建設すると、松本の製糸業はさらに発展しました。

松本の蚕糸業の発展を背景に大正3年(1914)、日本銀行松本支店が城下町の本町に置かれました。日本銀行の支店のほとんどは県庁所在地に置かれています。県庁所在地でない松本に置かれたのは、松本が製糸業の集積地であったためです。

これにより松本は県内金融界の中心となり、さらには当時の産業経済からみても、中部日本の要の地として重視されていくようになります。

近代化の中で教育にも力が注がれ、市内には廃寺となった寺院を活用して多くの学校が開校しました。開智学校も、元は戸田家菩提寺の全久院ぜんきゅういんの跡地を利用して開校しています。その後、大正期には旧松本高等学校が誘致されるなど、松本は教育熱心な地域となりました。

また、松本の人々は進取の精神に富み、近代化を受けて松本の城下町の景観は大きく変貌しました。その中で、洋風建築や看板建築の商家などの近代的な建物や、旧松本区裁判所庁舎（重要文化財）、旧第一勧業銀行松本支店（登録有形文化財）などが建築されました。

(6) 現代のまつもとの文化

民芸運動

「民芸」は、柳宗悦やなぎむねよしが大正期に無名の職人によって作られた日常雑器の中に美を見出し、理論化し提唱した美術運動です。白樺派の同人だった柳宗悦たちの思想は信州の教師に影響を与え、これを支持する教師たちは「信州白樺派」と呼ばれました。

松本は、江戸末期から作られた帳場ちょうばたんす筆箱が松本筆箱として知られていましたが、それに加え明治時代には一閑張いつかんばりなどの家具生産が盛んになりました。しかし、家具生産は大正末期から昭和初期をピークに衰退します。信州には柳宗悦らと交流をした歴史があり、松本周辺には有能な木工や染織の作家が多く、戦後松本市は、民芸による地場産業の復興を計画します。

昭和 21 年（1946）には日本民芸協会長野県支部が発足します。柳の薫陶を受けた丸山太郎は昭和 37 年（1962）に「松本民芸館」を開館しました。同じく池田三四郎はバーナード・リーチの指導で家具を製作販売し、現在「松本民芸家具」として知られています。三代澤本寿みよさわもとじゅは型絵染の作家として活躍し、商業デザイン等に大きな影響を与え、今でも市内の至る所で三代澤の作品を目にします。

「民芸の街」松本に、全国からものづくりを志す若者が集まるようになり、柳から影響を受けた地元の作家たちは、そうした若者を受け入れ、技術を伝えました。

そして、松本の若い工芸作家たちによって、昭和 60 年（1985）「クラフトフェアまつもと」が開始されました。令和元年（2019）で 35 回を数え、全国でも歴史が古く、毎年 5 月に開催されるこのイベントは初夏の風物詩として、全国から毎年 5 万人前後もの人を迎えています。

新産業都市

昭和 38 年（1963）7 月、松本諏訪地区新産業都市指定が内定しました。このときは全国で 13 地区が内定し、そのうち松本諏訪地区は唯一内陸部に立地するこ

とで注目されました。産業の地域格差を解消することが新産業都市建設促進法の主旨でしたが、実質は巨額な国の資本を期待する新たな産業の拠点づくりでした。松本市では^{ふるはたとくや}降旗徳弥市長を先頭に積極的な誘致運動を行い、指定実現に至りました。指定を受けた松本諏訪地区には、南は茅野市から北は大町市に至る6市3郡17町村が含まれていました。新産業都市の指定は、新たな松本づくりの太い骨格の一つになりました。

現代の松本―「三ガク都」

松本市は、東は美ヶ原高原から、西は上高地・北アルプスの槍・穂高連峰までの広い市域を有し、豊かな自然環境に囲まれています。

現在、本市は市の特徴を表す言葉として、「三ガク都」を標榜しています。「三ガク都」とは「岳都」、「楽都」、「学都」の3つです。「岳都」は、周囲を自然豊かな山に囲まれ、多くのアルピニストが訪れる山の玄関口としての松本を示しています。「楽都」は、鈴木鎮一^{しんいち}氏が昭和21年（1946）に創始し、多くの音楽家を輩出してきた「スズキメソード」や、平成4年（1992）から始まった世界的指揮者小澤征爾^{せいじ}らが集い演奏する「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」（現在は「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」と改称）を始め、市民レベルまで含めた音楽活動が盛んなことや、それらの活動の舞台となるホールなどが充実しており、街全体が音楽の気風に満ちていることによります。「学都」は、旧開智学校や旧松本高等学校に見られるように、学校教育に力を入れてきた歴史と、社会教育・生涯学習の実践が盛んで、教育を尊重する気風があることによります。

これらの「三ガク都」の言葉に代表されるように、松本は自然、文化、歴史を礎にした魅力ある都市となっています。

「普通選挙運動」・「花いっぱい運動」

松本市では、近代から現在に至るまで、全国のさきがけとなる運動が展開されてきました。

明治時代には、普通選挙運動が起こります。普通選挙運動は、日清戦争後の社会問題の発生を背景に、松本で全国にさきがけて本格的に始まりました。明治30年（1897）に中村太八郎^{たはちろう}（東筑摩郡山形村出身）は、松本藩出身の木下尚江^{なおえ}らとともに緑町に事務所を置く普通選挙期成同盟会を結成しました。この会は、普通選挙運動の全国のさきがけとなった結社であり、松本が普通選挙運動発祥の地と言われる由縁です。松本市中央図書館の前庭には、「普通選挙運動発祥の地」の記念碑が建立されています。

昭和になると、前述の民芸運動と花いっぱい運動が起こります。民芸運動は、戦争により元気をなくした松本に一つの方向性を示したといわれます。また、花いっぱい運動は、戦後まちが荒廃し人々の心にも余裕を持てない中で、「社会を美しく・明るく・住みよくする」ための精神運動で、花を通じて人々の気持ちを豊

かにとの願いを込め、昭和 27 年（1952）、当時松本市の小学校の教員だった小松一三夢によって始められました。この運動は次第に全国に広がっていき、昭和 36 年（1961）に花いっぱい運動 10 周年記念・第 1 回世界大会が開催されました。

この大会はほぼ毎年全国の自治体で開催されていますが、平成 19 年（2007）には市制 100 周年を記念して第 50 回目の大会が、平成 29 年（2017）には市制施行 110 周年記念として第 57 回目の大会が開催されました。

(7) 松本市の歴史に関わりのある主な人物

【石川 康長】 松本城天守を築造

生年不詳～嘉永 19 年（1642）

石川数正の長男で、朝鮮出兵途中に病没した数正の後を継いで城郭と城下町の整備を進め、文禄 2 年～3 年（1593～1594）に松本城天守を築造しました。慶長 18 年（1613）、大久保長安が死後に罪を問われて一族が失脚し、康長の娘が長安の長男に嫁いでいたことから、石川家も改易となりました。松本城太鼓門石垣には、康長の官職名にちなんだ「玄蕃石」という石があり、この石に乗って運搬指揮したという伝説があります。



玄蕃石
(松本城太鼓門)

【小笠原 忠政（忠真）】 織田信長と徳川家康のひ孫 小笠原家最後の松本藩主

慶長元年（1596）～寛文 7 年（1667）

松本藩主小笠原秀政の次男で、母は織田信長の娘と徳川家康の息子の間に生まれた登久姫（福姫）です。慶長 20 年（1615）の大坂夏の陣に秀政と兄の忠脩とともに参加しますが、秀政と忠脩が討ち死にし、19 歳で松本藩主となりました。元和 3 年（1617）に明石（現在の兵庫県明石市）、寛永 9 年（1632）には小倉（現在の福岡県北九州市）に転封となります。忠政はぬか漬けを好み、松本から持って行ったぬか床を小倉城下に広めたと伝えられています。



忠政が深志神社に寄進した宮形

【戸田 康長】 臣下で初めて松平姓と葵紋を許される

永禄 5 年（1562）～寛永 9 年（1632）

康長は三河国二連木（現在の愛知県豊橋市）城主の子として生まれました。元服の時に徳川家康から名前を一字与えられて康長と名乗り、松平姓を与えられたため、松平康長とも言います。家康からの信頼も厚く、穏やかな性格だったと伝えられています。家康の義妹の松姫を正室に迎え、死後も五社（現在の松本神社）に二人仲良く祀られています。



戸田 康長

【松平 直政】 松本城月見櫓・辰巳附櫓を築造

慶長 6 年（1601）～寛文 6 年（1666）

徳川家康の次男の結城秀康の三男として生まれ、将軍家光とはいとこの間柄でした。慶長 19 年（1614）の大坂冬の陣では、越前藩の軍勢の先頭で真田の軍勢と

戦い、家康から称賛されました。

寛文 10 年（1633）、戸田康直の後の松本藩主となり、松本城天守の月見櫓・辰巳附櫓の築造、寛永通宝松本銭の鑄造などを行いました。寛永 15 年（1638）に松江に移る際、直政は松本のそば職人を連れて行き、これが出雲そばの起源となったともいわれています。

【水野 忠職】 領内総検地を行い藩政を確立

慶長 18 年（1613）～寛文 8 年（1668）

水野家は徳川家康の生母の於大の方の実家にあたり、将軍家と深いつながりがありました。忠職は松本藩主の在任中、3 度も大阪城代を務めています。松本では領内全体の検地を行い、藩の生産量や年貢の量を正確に把握し、藩の政治を確立しました。また、信仰心も厚く、岡宮神社本殿の造営や、岡宮神社と深志神社に神輿を寄進しています。

【戸田 光則】 松本藩最後の藩主

文政 11 年（1828）～明治 25 年（1892）

光則は 22 代城主光庸^{みつね}の次男として生まれました。幕末の動乱期に城主となり、長州戦争に出兵し、水戸天狗党と和田峠で戦いました。また、それ以前に起こった松本藩士の外国人殺傷事件（第二次東禅寺事件^{とうぜんじ}）によって一時謹慎を命じられるなど、苦勞の多い藩主時代でした。明治を迎えると廃仏毀釈を厳しく行いました。戸田康長以来与えられてきた松平姓と葵の紋を返上し、廃藩置県によって松本を去り、東京へ移りました。

【市川 量造】 破却の危機にあった松本城天守を救う

弘化元年（1844）～明治 41 年（1908）

下横田町の副戸長を務めていた明治 5 年（1872）、松本城天守が競売にかけられ、235 両余りで落札されたことを知り、天守を産業振興の拠点として活用しようと考えました。自らの資金と人々から募った寄附で天守を買い戻し、取壊しの危機から救い、明治 6 年（1873）から明治 9 年（1876）年にかけて 5 回にわたって天守を会場に博覧会を開催しました。また、松本で最初の新聞である「信飛新聞」の創刊や、自由民権運動でも活動しました。

【小林 有也】 松本城の明治の大修理を行った松本中学校校長

安政 2 年（1855）～大正 2 年（1913）

和泉国伯太藩（大阪府）の出身で、明治 19 年（1876）から松本中学校校長を 29 年間務めました。松本中学校は松本城の本丸・二の丸を校舎と校庭としており、荒廃した天守の惨状を見て、後に松本市長となる小里頼永らと明治 34 年（1901）、松本天守閣保存会を設立して寄附金を集め、明治 36 年（1903）から大正 2 年（1913）



寛永通宝松本銭



岡宮神社神輿
(忠職寄進)



戸田 光則



市川 量造



小林 有也

にかけて、「明治の大修理」と呼ばれる松本城の修理を行いました。

【小里 頼永】 初代松本市長 「国宝市長」と呼ばれる

安政 2 年（1855）～昭和 16 年（1941）

松本藩の江戸屋敷に生まれ、北深志町の町会議員、東筑摩郡会議員、長野県会議員を経て明治 23 年（1880）に衆議院議員選挙に当選。明治 35 年（1892）に松本町の町長となり、明治 40 年（1897）の市制施行後、初代松本市長となりました。昭和 12 年（1937）まで市長を務めて、旧松本高等学校の誘致、松本城天守の修理工事などを行い、国宝市長とも呼ばれました。



小里 頼永

【立石 清重】 開智学校校舎を設計・施工した大工棟梁

文政 12 年（1829）～明治 27 年（1894）

立石家は代々大工棟梁職を継ぎ、松本藩にも出入りしていました。開智学校の建設を請け負った清重は、東京・横浜に見学に出かけて目にした擬洋風建築の要素と、自身の経験に基づく和風の要素を組み合わせ、国宝の旧開智学校校舎を建築しました。清重は人々の信望厚く、性重厚にして、西洋文化を積極的に取り込む進取の気性に富んでいたといわれます。また、手掛けた建築に関する工事記録など、多くの建築帳面を残し、立石家の子孫により守り伝えられてきました。この帳面の一部は、旧開智学校の建築資料として、国宝の附指定になっています。



立石 清重

【今井 五介】 明治から昭和の松本の経済の発展に尽力

安政 6 年（1859）～昭和 21 年（1946）

岡谷の片倉市助の三男として生まれ、平野村（現在の岡谷市）の今井家を継ぎました。明治 23 年（1890）、片倉家が経営する松本製糸場の場長となり、松本の製糸業を牽引し、明治 41 年（1908）には松本商工会議所の初代会頭に就任しました。信濃鉄道（現在の大糸線）の松本 - 大町間の開業、電力普及など松本の経済の発展に貢献しました。上土町にあった私塾の戊戌学会の経営難に際しては、片倉から多額の資金を寄附し、明治 44 年（1911）に松本商業学校（現在の松商学園高校）とし、昭和 11 年（1936）には、東洋一といわれる校舎を新築しました。



今井 五介

4 文化財等の分布状況

松本市には、多くの文化財が残されており、指定等が行われている文化財だけでも、国 105 件、県 36 件、市 238 件の合わせて 379 件を数えます。その内訳は、下記の表に示すとおりです。

(令和 7 年 4 月 1 日現在)

種類		国		県	市		計
		指定	登録	指定	指定	登録	
有形文化財	建造物	11	78	5	26	7	127
	絵画	0		1	6		7
	彫刻	5		9	34		48
	工芸品	1		1	12		14
	書籍・典籍	1		0	5		6
	古文書	0		0	5		5
	考古資料	0		3	11		14
	歴史資料	0		1	33		34
民俗文化財	有形の民俗文化財	3		0	5		8
	無形の民俗文化財	0		1	25		26
記念物	史跡	3		4	19		26
	名勝	1		2	10		13
	動物、植物、地質鉱物	2		9	40		51
計		27	78	36	231	7	379

	国	県
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	2	1

* 件数は、同一の物件につき、2 つの種別に重複して指定が行われている場合（例えば、名勝及び天然記念物など）、それぞれの種別につき 1 件として数えています。

(1) 国指定等文化財

国指定文化財は 27 件あり、有形文化財として建造物 11 件、彫刻 5 件、工芸品 1 件、書籍・典籍 1 件があります。また、有形の民俗文化財 3 件、記念物として史跡 3 件、名勝 1 件、動物、植物、地質鉱物 2 件があります。登録有形文化財 78 件は全て建造物です。主な文化財の概要は以下のとおりです。

【国宝 松本城天守・史跡 松本城】

松本城の本丸・二の丸・外堀・総堀の一部・総堀土塁の一部が史跡に指定されています。松本城天守は、現存する 12 天守の一つで、天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の 5 棟からなり、天守、乾小天守、渡櫓は文禄 2～3 年（1593～1594）、辰巳附櫓、月見櫓は寛永年中（1630 年代）に築造されたと考えられます。5 層 6 階の天守を中心に、5 棟の建物が一体になっている連結複合式という特徴的な平面構成をとっています。城郭の縄張と天守が一体となって城郭としての姿をよく示しています。



松本城

【国宝 旧開智学校校舎】

明治 9 年（1876）に建設され、漆喰塗の外壁を持つ 2 階建の屋根上に八角形の塔を載せる姿は、洋風を基調としつつ和風の伝統意匠と融合させており、擬洋風建築の特質をよく表しています。内部には級別の教室や広い講堂を備え、学校建築として先駆的な計画性を示しています。



旧開智学校校舎

【重要文化財 旧松本高等学校】

本館と講堂があり、本館は大正 9 年（1920）、講堂は大正 11 年（1922）の建築です。大正時代の木造洋風建築例としては規模も大きく、保存も良好です。学校教育史及び学校建築史の上でも、大正時代の旧制高等学校の状況を良く伝えています。



旧松本高等学校（本館）

【重要文化財 旧松本区裁判所庁舎】

明治 41 年（1908）に松本城の二の丸御殿跡に建築され、昭和 52 年（1977）まで裁判所庁舎として用いられました。両端に翼部を付けた左右対称の立面で、中央に車寄くるまよせを構え、全体を近代和風意匠でまとめています。平面は H 字形で、南翼部に支部訟廷、北翼部に区訟廷などを配しています。明治後期の区裁判所庁舎の典型的な特徴をよく示しています。



旧松本区裁判所庁舎

【史跡 小笠原氏城跡】

室町時代から戦国時代にかけての信濃守護小笠原氏の本拠となった城跡で、平地に築かれた井川城、山城である林城（大城、小城）から成ります。小笠原氏の居城は、15 世紀後半には井川城から防御性に優れた林城に移ったと考えられており、戦国期に全国的に見られる平地から山城へという領主の居城の変化の典型的な例です。いずれの城跡も保存状態が良好で、室町時代から戦国時代に至る領主の居城の在り方を具体的に知ることができます。



小笠原氏城跡

【特別名勝及び特別天然記念物 上高地】

上高地は、槍・穂高連峰をはじめとした北アルプスの山岳地帯で、山岳と溪谷を主とした名勝地として特別名勝に、天然保護区域として特別天然記念物に指定されています。我が国の代表的な山岳景観地であり、多くの登山客・観光客が訪れています。



上高地（河童橋）

【特別天然記念物 白骨温泉の噴湯丘と球状石灰石】

安曇地区の白骨温泉にあります。噴湯丘は、温泉の湧出口の周囲に沈殿した石灰華（炭酸カルシウム）が次第に高くなり丘状となった地形です。球状石灰石は湧出口付近の湯だまりにでき、直径1～10mm ときには4 cm にもなります。白骨には100以上の噴湯丘があるとされています。



白骨温泉の噴湯丘

【登録有形文化財 旧第一勧業銀行松本支店】

松本城に向かう大名町に東面して建ち、鉄筋コンクリート3階建、一部地下室及び塔屋付で、1階は吹抜けの大空間となっています。独特の曲線形状になるアーチの開口が正面に7連、両側面と背面に各3連開けられており、外観を特色づけています。



旧第一勧業銀行松本支店

【登録有形文化財 旧光屋店舗兼主屋】

旧善光寺街道に東面して建つ間口15mに及ぶ大型の町家です。木造2階建、外壁は大壁造で、正面上屋には掛子塗両開戸を吊る窓を6カ所開けています。座敷構えや欄間など意匠、材料とも洗練された建物です。



旧光屋店舗兼主屋

【登録有形文化財 松本館旧館】

松本城近傍に建つ料亭建築です。長方形平面の2階建部と、平屋建の北西張出部からなっています。2階は南端に階段を設けて他は一室の大広間「鳳凰の間」とし、地元の彫刻家太田南海の手による床柱や、折上格天井、建具など各所に壮麗な装飾を施した内装を備えています。



松本館旧館

【登録有形文化財 日本聖公会松本聖十字教会】

松本城の北西に南面して建つ木造の教会です。急勾配の切妻屋根に赤色瓦を葺き、南東側に鐘楼があります。三廊式で小屋はシザーストラスを組んでいます。身廊側面に窓や尖頭アーチを用いるなどゴシックを基調とする一方、祭壇の小屋に絵様付木鼻を付すなど独自の意匠が見られます。



日本聖公会
松本聖十字教会

【登録有形文化財 嘉門次小屋^{かもんじ いろり}囲炉裏の間】

上高地の明神池畔^{かみじょう}にあり、小屋名はウェストンなど登山家の山案内を務めた上條^{かみじょう}嘉門次に由来します。木造平屋建、切妻造石置板葺です。外部は板張で、内部は板敷として大きな囲炉裏を設け、東側を土間としています。大正期における山人の生活様態をよく伝える建物です。

【登録有形文化財 徳本峠小屋休憩所^{とくごう}】

上高地に至る登山道の徳本峠に建てられた山小屋です。木造平屋建、切妻造石置板葺です。内部は板敷で一部が土間になっています。近代登山の舞台となった北アルプスに開設された山小屋の初期形態をとどめる建物です。



嘉門次小屋



徳本峠小屋休憩所

(2) 県指定文化財

県指定文化財は36件あり、有形文化財として建造物5件、絵画1件、彫刻9件、考古資料3件、歴史資料1件、工芸品1件があります。また、無形の民俗文化財1件、記念物として史跡4件、名勝2件、動物、植物、地質鉱物9件があります。主な文化財の概要は以下のとおりです。

【長野県宝 橋倉家住宅】

松本城下町の北東部の武家地である東ノ町に位置する江戸時代終わり頃の武家住宅です。橋倉家は幕末には徒士でした。若干の改造があるものの、江戸時代の武家住宅の形式や間取りが良好に保存されています。



橋倉家住宅

【長野県宝 旧山辺学校校舎】

明治18年(1885)に、国宝旧開智学校校舎をモデルとして建設されました。木造2階建てで、屋根の中央に八角形平面の塔^{とう}屋が載っています。旧開智学校校舎と比較すると、旧山辺学校校舎は全体的に簡素な造りで、旧開智学校校舎は窓にガラスを用いていたことから「ギヤマン学校」、旧山辺学校校舎は障子を用いていたことから「障子学校」と呼ばれていました。



旧山辺学校校舎

【長野県宝 旧松本カトリック教会司祭館】

明治10年代の後半に布教のために松本にやってきたクレマン神父が、旧三の丸武家屋敷跡に建設した建物です。外観^{した みいたばり}の下見板張の技法はアーリー・アメリカン様式の特徴を持ち、レンガ基礎にはイギリス積みを採用するなど、純西洋館の姿をとどめています。現在は、旧開智学校校舎西側に移築復原されています。



旧松本カトリック教会
司祭館

【長野県宝 旧念来寺鐘楼】

宝永2年(1705)建立の入母屋造、袴腰付きの建物で、廃仏毀釈で廃寺となった念来寺で唯一残された建物です。市内にある鐘楼の中でも大きく立派な構えで、楼上の柱間は2間×3間、軒裏の全面には雲形の彫刻が施されています。



旧念来寺鐘楼

【長野県宝 里山辺お船祭りのお船】

里山辺の須々岐水神社の例大祭はお船祭りと呼ばれ、氏子の9町会がお船を曳き出します。お船は江戸時代後期から幕末にかけて作られたものが多く、いずれのお船にも見事な彫刻が施されています。



里山辺お船祭りのお船

(3) 市指定等文化財

市指定文化財は238件あり、有形文化財として建造物26件、絵画6件、彫刻34件、工芸品12件、書籍・典籍5件、古文書5件、考古資料11件、歴史資料33件があります。民俗文化財には、無形の民俗文化財25件、有形の民俗文化財5件、記念物として史跡19件、名勝10件、動物、植物、地質鉱物40件があります。

また、松本市文化財保護条例に基づき、松本市が独自に設けている松本市登録文化財として7件があります。主な文化財の概要は以下のとおりです。

【松本市重要文化財 高橋家住宅】

松本城北側の徒士町にある江戸時代中期の武家住宅で、当時の間取り等がよく保存されています。松本城下町に残る数少ない江戸時代の建造物であり、現存する武家住宅としては、長野県内でも最も古い建物の一つとされています。



高橋家住宅

【松本市重要文化財 千鹿頭神社本殿・松本市重要文化財 千鹿頭社本殿】

二つの神社のある千鹿頭山は、江戸時代初めまで松本藩領でしたが、元和4年(1618)に尾根を境に松本藩と高島藩に分かれることになり、それまで一つであった社殿は松本藩林村の千鹿頭神社と高島藩神田村の千鹿頭神社に分かれ、二つの神社の本殿が並んで建てられました。

千鹿頭社本殿は18世紀中期の松本工匠の様式を、千鹿頭神社本殿は18世紀前期の諏訪工匠による建築様式をよく示しています。

【千鹿頭社本殿】



千鹿頭社（左）
千鹿頭神社（右）

【松本市重要文化財 深志神社神輿^{みこし}】

松本藩主の水野忠直が寄進した2台の神輿で、元禄11年(1698)の棟札が残っています。屋根と基礎の台の四面に、宮村大明神のものには梶の葉の紋が、深志天満宮のものには梅鉢の紋がみられます。各部の彫刻や金具の図案もすぐれ、美術的・工芸的に価値の高いものです。



深志神社神輿

【松本市重要有形民俗文化財 松本城下町の舞台^{よはしら}】

松本地方では祭礼に曳き出される山車を舞台と呼んでいます。深志神社、岡宮神社、四柱神社の例大祭に曳き出される舞台18台が「松本城下町の舞台」として、松本市の文化財に指定されています。大半が明治21年(1888)の南深志の大火後、再建されたもので、地元の職人により松本平独自の形式で製作されています。



松本城下町の舞台

【松本市特別史跡 源智の井戸^{げんち}】

この井戸は松本城下町が形成される前から飲用水として使われ、この井戸の所有者で、天正年間に小笠原貞慶の家臣だった河辺縫殿助源智^{ぬいのすけげんち}の名をとり、源智の井戸とよばれています。歴代の領主や城主は、不浄なき旨の制札を出して保護に努め、天保14年(1843)に著された「善光寺道名所図会」には、「当国第一の名水」と記されています。



源智の井戸

【松本市特別史跡及び特別天然記念物 槻井泉神社の湧泉とケヤキ^{つきいずみ}】

槻井泉神社の湧泉は、古代以来のものと伝えられ、このあたりの地名「清水」の由来となった由緒ある湧水です。江戸時代には、湧泉の水を利用した染色、製紙の生業がこの一帯で行われました。湧泉の背後にあるケヤキは高さ25メートルほどの大木です。



槻井泉神社の湧泉とケヤキ

【松本市特別史跡 戸田家廟園】

松本藩主戸田家の廟園で、松本城下町の東側の四ツ谷にあります。内域には「丹波塚」と呼ばれる戸田丹波守康長の墓の他、松本藩主の光行、光年の墓などがあります。

廟園の南側には、廟所の寺で前山寺の長屋門が残っています。



戸田家廟園

【松本市登録文化財 旧デリー（壱の蔵）】

松本城下町の中町の通りに南面して建つ明治40年(1907年)に建築された木造2階建の土蔵造の建物です。外壁は黒漆喰の仕上げ、腰部はなまこ壁となっています。昭和45年(1970)から平成29年(2017)まで「カレー店デリー」として用いられ、市民にも親しまれている建物です。



旧デリー（壱ノ蔵）

(4) 主な未指定文化財

ア 松本市近代遺産の建造物

松本市では、松本市歴史的風致維持向上計画に定める重点区域内に存在する築50年以上の建造物で、歴史的価値を有するものと認められるもの（指定文化財を除く）を、松本市近代遺産（近代のまちの歴史を伝え、その存在自体がまちの魅力向上につながるもの）として登録しています。令和7年4月現在 123件の建造物を登録しており、近代以降の建造物がほとんどで、土蔵造や看板建築の店舗、洋館などがあり、まちなみ景観を形作っています。



伊原漆器専門店



ちきりや工芸店



ミドリ薬局



旧白鳥写真館



宮島耳鼻咽喉科医院



上條医院



旧青木医院

(5) 松本市の特産品、工芸品、食等

リンゴ

全国第2位のリンゴの産地、長野県の中でも、松本市は南西部を中心に栽培が盛んで、長野市に次ぐ産地となっています。特に梓川地域は、全国に先駆けて接木による「おい化栽培」に取り組んだ地域として知られ、シャキッとした歯ごたえと蜜がたっぷり入った高品質なリンゴが評判です。主力のサンふじ、つがるの他、近年は、長野県の独自開発品種のシナノスイート、シナノゴールド、秋映（あきばえ）等も多く生産されています。令和元年（2019）には、J A松本ハイランド産のSサイズのふじが、内臓脂肪低減効果があると認められ、長野県のリンゴとしては初となる「機能性表示食品」となりました。



リンゴ

ブドウ

山辺地域は、長野県のブドウ栽培発祥の地として知られ、200年近く前から栽培されていたとの記録も残っています。昭和30年代からトラックに荷を積んで大消費地に運ぶという当時としては珍しい「産地直送」に取り組み、「山辺ぶどう」の名で知れ渡りました。現在は、今井地域でも多く栽培され、デラウェア、巨峰、ナガノパープル、シャインマスカットといった品種のほか、松本オリジナルの黄華（おうか）やワイン用ブドウの栽培も広がっています。令和元年（2019）には、国から松本市・山形村・朝日村をエリアとする「信州松本平ワイン・シードル特区」に認定され、小規模醸造所誕生の機運も高まっています。



ブドウ

スイカ

第2次世界大戦前から波田地域で始まったスイカの生産は、昭和30年代以後水田転作作物として栽培面積を広げ、現在は波田・和田地域を中心に、長野県で生産されるスイカの約7割を産出する一大産地を形成しています。土質が火山灰由来で水はけが良いことに加え、松本盆地の気候の気候で昼と夜の寒暖差が大きいことや日照時間が長いことなどから、糖度が高く、独特のシャリシャリの食感が楽しめるスイカが生まれます。



スイカ

松本一本ねぎ

白い部分が多く太い長ねぎのルーツを辿ると松本一本ねぎに行き着くと言われる程、歴史のあるねぎです。松本市山辺に室町時代から伝わる「兎の吸い物」伝説にも登場し、江戸時代には将軍家にも献上され、関東、中京方面に贈答用として珍重されたという記録が残っています。春に植えた苗を、夏に一度掘り起こして植え替えることにより、曲がった形状となり、甘みや柔らかさが増します。



松本一本ねぎ

稲核菜

江戸時代に野麦峠を越えて持ち込まれた飛騨の赤かぶが原種とされ、松本藩にも献上されていました。昭和の初めには松本平一帯で栽培されていましたが、その後、野沢菜の栽培が盛んとなり、原産地とされる安曇地区稲核でのみ栽培される固有種となっています。この地区には「風穴」といわれる天然の冷蔵庫が各所があり、漬物として翌年の秋まで保存できる環境にありました。



稲核菜

松本家具（松本民芸家具）

木材が豊富で乾燥した気候の松本市は家具作りに最適な場所であり、古くは安土桃山時代にさかのぼり、江戸期には^{ちようばたんす}帳場箆箆に代表される松本箆箆が作られました。戦後は民芸運動に影響を受け、松本民芸家具として洋家具の製作を始め、昭和 51 年（1976）には、家具業界で初めて通産大臣から伝統的工芸品に指定されました。

主要な材料として、硬くねばり強いミズメザクラ（梓の木）が使われますが、その硬さゆえ、機械ではなく職人の手によって家具とされます。

良質な材料と鍛え抜かれた職人の技によって生まれる松本民芸家具は、美しく、堅牢であり、使うほどに味わい深く、生涯の友と呼べるものとなっています。



松本家具（松本民芸家具）

松本てまり

てまりは、江戸時代の古くから伝えられる手工芸品の中でも、特に民俗資料として高く評価され、その技法を守り伝えられているものの一つです。

松本てまりは、江戸時代中期（1750 年頃）松本藩の婦人の指先から生まれたもので、当時この地方の童女たちの玩具としてもてはやされたものです。その文化的技法は今なお連綿と守り伝えられ、現在のてまりも当時のままのものを忠実に復元し、それに近代的な色彩感覚を盛ったものとなっています。



松本てまり

楽器製造業

適度に乾燥した気候が楽器の製造に適していることから、松本市には日本を代表するギターメーカーがあります。1960 年代のビートルズなどによるエレキギターブーム、それに続くフォークブームの中で生産量を伸ばし、昭和 58 年（1983）、松本市のエレキギターは生産高世界一を記録しました。

その後、ギターの生産拠点の海外移転が進みましたが、松本市のメーカーは自社ブランド製品の開発やオーダーメイドに特化し、トップミュージシャンからも高い評価を得るなど独自の地位を築いています。

市内にはギターの他にも、同じ弦楽器であるヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの職人もおり、楽器製造の分野でも「楽都・松本」を大いに盛り上げています。



楽器（ギター）

蕎麦

周囲を山に囲まれた松本平では、米の生産が難しかった山間部を中心に栽培され、そばを粉にして団子やそばがきにしていたが、江戸時代に松本市の南に位置する中山道の本山宿（塩尻市）から始まったとされるそば切りがいち早く伝えられ、庶民の食べ物として普及しました。

毎年秋には、地元をはじめ、全国のそば処が一堂に会する「信州・松本そばまつり」が松本城を会場に開催されています。



蕎麦

日本酒、味噌・醤油

松本市は日本の屋根北アルプスを望み、その山々を源とする伏流水と澄んだ空気に恵まれ、日本酒、味噌を始めとする諸醸造が盛んに行われてきました。

現在、松本市内の酒造業は6社、味噌、醤油の醸造業は9社あり、それぞれが個性を活かした醸造を行っています。

味噌とたまり醤油の製法を中国（宋）から我が国に伝えたといわれる鎌倉時代中期の臨済宗の高僧、心地覚心（法燈圓明国師）は、現在の松本市神林の出身です。



日本酒、味噌

山賊焼き

鶏の一枚肉をニンニクなどの入った醤油タレに漬け込み、片栗粉をまぶして揚げた料理です。松本市を含めた地域一帯で親しまれています。



山賊焼き